

2008年11月29日勉強会 議事録

ボードリアール『消費社会の神話と構造』第二部Ⅱ・Ⅲ

発表者 石堂匡史

参加者 嶋田・岩瀬・市川・厚地・安達・十河・久富

## Ⅱ. 消費の理論のために

### 【ホモ・エコノミクスの屍体解剖】

・ガルブレイス——“自由で意識的な主体”の意味を確認。

⇒自由意思があるかないか…すべての物事は決定している。

人間は自分の意思に従って行動しているわけではない

Ex) 洗濯機・携帯電話

本人はそれが欲しいと思っていると思っている

ガルブレイスの立場

○自由意思・・・人間を主体とする

-----  
×無意識・・・・・・主体を否定する

フロイト・ボードリアールの立場

・ガルブレイスの見方は一般的か？⇒近代経済学では“人間は合理的に行動する”

ボードリアールの立場…現代の経済学に対する批判

そこに“人間の自由意思”など存在しない

### 【モノの動勢、欲求の動勢】

・反復とは？——P85 “同語反復”

“火が燃えるのは…”・・・自分が思うことによって自分の中でのみ実現する。

Ex)生命保険会社のCM（当社はNo.1です→どこと比べて？でもそう言っているのだからNo.1なのだろう）実際のものとの交渉はない。閉じたサークルで完結する。

でも「自分が欲しかったから買った」——形にはできないけれど、やはり何か理由があるのでは？という意見がでた。

カント { 物事にはすべて原因がある  
⇔矛盾  
自由意思がある

“無意識がある” ←証明できない・・・



【娯楽システム、あるいは享受の強制】

【新しい生産力の出現とコントロールとしての消費】

・生産時代から消費時代へ変わったことで一見、豊かになったように思えるが、実際に「革命」は起こっていない。実際にはほとんど変わっていないのに、欲求の開放や個性の開花…と見せかけている。

生産力とその統制の拡大生産に無理やりまきこまれているだけ ← “イデオロギー” (※)

システムの維持

“イデオロギー” = 時代の意味？

“システムを動かすものの一部に巻き込まれている” ことは変わっていない

※マルクス主義の“イデオロギー”…実際にはそうでないのに、現実を見させないために別の認識を与えて、そう思い込ませる。

【個人の演算機能】

・消費者であり労働者でもある ← “イデオロギー” が「あなたは消費者である」と思い込ませている

・今や資本家 ← VS → 労働者という明確な対立はないが・・・

歴史的に自分たちが勝ち得たが、結局は変わっていない

フランス革命, etc,

→それを“消費”が覆い隠し、ごまかしている

・「労働疎外は消費社会でも生産社会でも変わらない」

・労働疎外について (『資本論』)

使用価値 > 交換価値 (労働力の維持費を含む)

↓

この差より余剰価値ができる

} 理論として成り立つ

・資本主義社会において、消費時代と生産時代で共通するものは・・・

ボードリアールはどう考えているのか。何を言いたいのか。

消費社会と労働者に対する警鐘ではないのか。

⇒結局、ボードリアールは、記号化が行き過ぎた社会に問題があると言っているのではないかという意見が出た。モノから記号だけが離脱して独り歩きしている (実態から離れすぎている)。以前は使用価値にお金を払っていたのが、今や記号 (本質ではないもの) にお金を払っている。

・ここ（P107）で政治的な問題がからんでくるのでは  
政治的と言っているのはあくまでも労働組合的なもので、社会全体というわけではない  
のでは。

“政治的自衛反応” →自分たちの労働関係云々ではなく、会社に対して自分たちが組織  
して行動を起こさなければというような感覚ではないか。

【消費的自我（エゴ・コンスマンス）】

・個人主義的イデオロギーは何を隠しているのか？

・消費者は“消費者”というカテゴリには入るが、消費者たちが連帯感を持っているわ  
けではない（個人主義） =矛盾

・民主主義と消費者会の共通点を言っているのでは。